

《博士論文要旨および審査報告》

日高 慎 東国古墳時代埴輪生産組織の研究
——埴輪生産の交流と地域性をめぐって——

——学位請求論文——

I 論文要旨

日高 慎

本論文は東国を中心として古墳時代の埴輪生産組織を考究したものである。埴輪生産組織を考えていく上で、埴輪製作工人集団をどのように見出していくかが重要な鍵になる。埴輪とは古墳に立て並べられる葬送用の道具である。発注から製作、運搬そして樹立という一連の流れが存在するわけであるが、全体としてどのような生産体制であったのかは、古墳時代の社会組織を考える上でも極めて重要な論点であると考ええる。埴輪生産組織の在り方が判明すれば、古墳時代の社会組織の解明にもつながるはずである。

第1章では埴輪製作工人集団を見出す方法として共通表現の検討をおこなった。一見すると同じような表現をもっていても他人のそら似として認識すべき場合と、共通表現として同一埴輪製作工人集団の製品と認識できる場合を明らかにした。第2章では人物埴輪の脚部に注目して各種要素の分布から地域性を抽出し、同一埴輪製作工人集団を見出す上で重要な視点であることを示した。第3章では認識できる共通表現から関東地方の埴輪製作工人集団を論じた。第4章では視点をひろげて、西日本、東海、関東以北の人物埴輪について埴輪表現を検討した。その結果、関東以北が人物埴輪導入期から独自性を持っていることが明らかになるとともに、東海地域よりも西方では極めて共通する表現をもってることが明らかになった。第5章ではここまで示してきた埴輪の地域性と地域を越えて分布する在り方について、埴輪生産組織の変革があったことを推定した。

第6章では下総型埴輪を樹立する古墳を取り上げて、古墳築造と埴輪について墳丘企画の面から論じた。同一埴輪製作工人集団の埴輪が供給された古墳に墳丘企画の面でも共通性があることを明らかにした。第7章では下総型埴輪を樹立する古墳の墳丘企画、内部主体の形態、副葬品などについて論じた。その結果、内

部主体に共通性が見出せないことが明らかになるとともに、副葬品の面からは特定の古墳に他と異なる性格、すなわち被葬者の生前活動の違いがある可能性を指摘した。

第8章では埴輪生産遺跡の全体像を把握するために、全国的な集成と埴輪生産遺跡の特徴について概観し、生産組織の変革期を考え、関東地方ではおおむね6世紀中葉ころに大きな画期があることを指摘した。

私の考える埴輪の意義については第9章から第11章で述べた。第9章では埴輪の樹立数と大きさについて墳丘の形や大きさとの相関関係を示した。第10章ではこれまでの見解についての問題点を指摘し、改めて被葬者の生前における「神を祭る儀礼」を再現したと推定した。第11章では動物埴輪の中でも特に狩猟場面について論じた。狩猟対象の鹿と猪とは、正と負、静と動、単と複、弱と強などすべてにおいて相反する性格をもっていたと認識し、鹿と猪という両方が必要であったことを示した。第12章では馬形埴輪にみられる横坐り乗馬を取り上げ、ひろく東アジア歴史世界のなかでの位置付けをおこなった。

終章では埴輪生産組織をめぐって、茨城県筑波山周辺産の埴輪を取り上げるとともに、埴輪製作工人集団の在り方を改めて示した。また、埴輪の意義については古墳築造との関わりで認識する必要性を説いた。さらに、東アジア歴史世界の中で古墳時代を位置づける相対化の必要性を示すことで、今後の埴輪研究の方向性を示した。

Ⅱ 審査報告

- | | | |
|--------------|----|-------|
| (主査) 専修大学文学部 | 教授 | 土生田純之 |
| (副査) 専修大学文学部 | 教授 | 矢野 建一 |
| (副査) 専修大学文学部 | 教授 | 高久 健二 |
| (副査) 聖徳大学文学部 | 教授 | 松尾 昌彦 |

て一]

審査委員会は、提出された本論文を問題関心、研究の先進性、論文構成の説得性、研究の到達点、考古資料収集の広さと実証性、将来展望の観点から審査した。また、口述試験において、直接、請求者本人より上記の審査観点についての判断材料を得た。

1 論文の骨子と評価

本論文は、長年埴輪研究をリードしてきた日高氏のこれまでの研究を整理して今後における研究のさらなる進展を期したものである。論理明快でありかつまとまりの良い論文であるが、その意味において同時に現時点における著者の中間報告的な意味合いをも兼ねている。

さて、論者は関東の人物埴輪（6世紀代を中心とする）を主たる分析対象に取り上げており、まず第1章から第3章では論者が「共通表現」と称する埴輪製作工人集団独特の表現様式を抽出する。具体的には埼玉古墳群に製品を供給した埼玉県生田塚埴輪窯出土の頭巾状被りものを付けた人物埴輪の場合、美豆良の形状、首飾りの分類、後頭部小孔の有無、垂髪の有無、鉢巻状表現の有無等を詳細に観察・分類し、同一工人集団による製品の同定を行う。また同様に関東に広く分布する双脚人物像の細部の観察から、その地域性を抽出し、各々の分布域を把握した。さらに上記の特徴をも含む諸点についての詳細な観察をもとに、各埴輪製作集団のあり様を考察した。すなわち、各埴輪工人の社会的地位——つまり各地域大首長に対する隷属性の程度やそうした関係を基礎とした遠隔地首長同士の政治的關係に基づく埴輪の移送、またこれとは逆に地域大首長との関係が希薄な工人集団（例えば下総型埴輪製作工人集団）の埴輪生産活動、および製品の供給範囲など、重要な問題点の解明に挑んでおり、多大な成果を得た。

続く第4章では一転して、本来人物埴輪が創出された後の畿内を中心とする西日本と関東をはじめとする東日本の人物埴輪を比較検討して、東西の境界を論じた。これによって、関東における人物埴輪の特徴を浮き彫りにした。

第5～7の各章では様々な観点から第2・3章で論じた下総型埴輪を有する古墳の共通性や具体像を述べて、下総型埴輪製作集団と埼玉古墳群築造大首長に隷属していた生田塚埴輪製作集団との差異を示唆した。

第8章では上記諸章から一転して埴輪生産の画期を検討する。その上で、畿内

ではそれが5世紀後半にあり、土師部の成立を示すこと、一方関東では6世紀中葉以降に画期（大量生産への移行）が認められるが、この時点で土師部が成立したと考えた。広く列島全体を視座に据えて歴史的意義に踏み込んだ意欲的な論考であるが、埴輪のみからの検討ではなお実証されたとまでは言い切れないであろう。この点については、今後も他方面に渡る追究が望まれる。

第9章は埴輪樹立古墳と円筒埴輪における規模の相関性、また人物埴輪の在り方と墳丘規模との関係を考察し、続く第10・11章の導入としている。こうして第10・11章では、人物埴輪群像の意味について、生前における神祭り儀礼を再現したものであり、動物埴輪の群像は同様に首長が行った狩猟儀礼の様子を再現したものと考えた。その上で各場面の詳細について逐一検討している。

第12章は横座り乗馬を示す埴輪を取り上げて、古墳時代における乗馬文化の具体像を考究している。

上記の諸章を踏まえた終章では、各章で検討した内容をまとめ、次いで今後の課題をあげている。

以上、本論文は人物埴輪を中心とした埴輪の詳細な分析をもとに考察した、極めて実証性の高い論考である。埴輪を製作した工人集団、彼らを統率し配下においた各地首長の動向、製作者と首長との関係性、地域の差異によるあり様の相違、埴輪樹立の意義など、分析は多方面に及んでおり、しかも重要な成果を得ている。

近年埴輪研究は盛況で、多くの研究者によって成果が問われている。そこでは極めて詳細な観察結果が報告されているが、一方で観察自体が目的化しており、肝心の歴史的考察にまで及んでいないことが多い。本研究はこうした傾向とは異なり、埴輪の分析から古墳時代社会の解明に向けて何が言えるのかという強い意識のもとに論述を進めた論考であり、多くの優れた示唆に富んでいる。中でも6世紀末において埼玉古墳群における埴輪樹立が終焉を迎えたために、その専属窯ともいえる生田塚窯の埴輪製作工人が、遠隔地や埼玉古墳群被葬者より下位に属する人々の墳墓にまで販路を広げるに至ったという指摘は、まさに長年埴輪研究に真摯に取り組んできた論者ならではの優れた視点である。

2 今後の課題

本論文は以上に述べたように、これまで論者が取り組んできた埴輪研究の現時点における集大成であり、その点で安定感がある。単なる「埴輪研究」ではない、

埴輪の分析に基づく古墳時代論であり、学界に裨益するところ極めて大きいものがある。しかし、今後より完成度の高い次元に導くために、——また論者は第一線の研究者としてそうしなければならない責務があるが——以下に述べるような諸課題をあえて指摘しておきたい。

第1に、共通表現等の認識に基づく「埴輪の型」の諸例と工人集団の特定について。論者は緻密に分析した如上の検討から古墳時代社会論へと進む。この点について異論はないが、最も多く生産された円筒埴輪についての論及を欠く。この点については他の研究者による分析が進んでおり、こうした成果を参照して人物埴輪の分析結果と照合すれば、なお大きな成果を得られたのではないか。今後の課題としてぜひ検討を進めてもらいたい。

第2に、埴輪製作工人集団と土師部の成立を直ちに結びつけることに若干の不安を覚える。考古資料と文献史料の成果を総合することには大いなる意義を認める。しかし、性格の異なる両者を総合検討するに際しては、特に慎重な姿勢が求められよう。今後別種の考古資料の検討をも踏まえての、さらなる追究を期待したい。

第3に、論文の構成にやや疑問を禁じ得ない。埴輪生産組織の研究という命題に対し、第10～12章は各々重要な課題には相違ないが、本論文の主題とはやや異なるテーマである。むしろ今後こうした論点の研究にもさらなる力を注いであうで、体系的な論文としてまとめる必要がある。論者はそうした研究を進める十分な力量を備えており、こうした面においても考古学界に貢献する責務があると考ええる。

3 口述試験

土生田、矢野、高久、松尾の4委員によって行われた。4委員からの総括的質問と個別的質問に対し、日高氏は適切かつ明快に答え、十分に対応したと判断できた。なお、傍聴者は10名（本学大学院・学部生）であった。

Ⅲ 学位授与要記

- | | |
|------------|--|
| 一、氏名・本籍 | 日高 慎（東京都） |
| 二、学位の種類 | 博士（歴史学） |
| 三、学位記番号 | 歴乙第五号 |
| 四、学位授与の条件 | 学位規則第四条第二項該当 |
| 五、学位授与の年月日 | 平成二十五年三月二十七日 |
| 六、学位論文題目 | 東国古墳時代埴輪生産組織の研究——埴輪生産の交流
と地域性をめぐって—— |
| 七、審査委員 | 主査 専修大学文学部 教授 土生田純之
副査 専修大学文学部 教授 矢野 建一
副査 専修大学文学部 教授 高久 健二
副査 聖徳大学文学部 教授 松尾 昌彦 |